船戸・藤心の陣屋跡を訪ねて

2022.6.26　高橋　眞

はじめに

5 月の連休を利用して船戸陣屋跡と藤心陣屋跡を訪ねました。
きっかけは、『流山市史研究』第 24 号に掲載された青柳理事長の論文を読んだことです。中でも「葛飾県・印旛県庁並びに田中藩本多家加村台屋敷跡の正門跡地を検討する」の論考の最後に青柳理事長が述べられた「昭和 50 年頃の県道工事を契機に周辺旧状もすべて消滅し、何の変哲もないただの広い道路や道路端の普通の緑地帯に様変わりし、市民の記憶が失われた。昭和 45 年撮影の『葛飾県庁跡』の古写真に見る白い案内標識は『葛飾県庁跡・流山市』と読み取れ、流山市が、県庁正門跡地（現緑地帯）に立てていたのであろう。標柱復活を望みたい。」という文章に刺激を受け、「船戸と藤心の陣屋跡は今どうなっているのだろうか？」という単純な疑問から、確認してこようと思ったのです。

尚、船戸陣屋跡の位置について、訪問したことで興味がわき、位置の特定について調査したので、その結果についても報告いたします。

１．船戸・藤心陣屋跡についての下調べ

まず、インターネットで「船戸陣屋跡」と検索してみる。すると船戸陣屋跡に関するブログなどがいくつか出てきた。藤心陣屋跡に関するものも同時に出てくる。

船戸陣屋跡に関するものは、いずれも船戸不動堂と柏市教育委員会作製の手書きの案内板、三峯神社、善哉庵などが写真付きで出てくる。藤心陣屋跡についても同様で、いくつかのブログが陣屋跡の石碑と手書きの案内板の写真、それに当時の門が柏市内の観音寺、法林寺に移設されている、などの情報が出てきた。これらのネット情報を予備知識とし、Google マップを印刷し、カーナビに目的地を入れて出発した。

２．船戸陣屋跡

常磐道を挟んで船戸不動堂の反対側の公園 P に車を止め、徒歩で不動堂を目指した。不動堂はすぐに見つかった。赤いお堂と、その前に案内板があったが、ネットで見た白地に手書きのものでなく、新しいものに変わっていた。（写真１、２参照）

説明の内容は活字化され、読みやすく、何よりも支柱がガッチリしていて驚いた。さらに当時の陣屋の位置を示す「絵図」が載っており、分かり易い案内板になっていると感じた。（写真３、４参照。案内板は木の葉の影で見にくくなっていることお許し下さい）

写真 1.　Web 上の旧案内板

写真 2. 今回訪問時の新案内板

写真 3. 案内板

写真 4. 「絵図」部分（拡大）

この時点では、絵図を見ながら不動堂の周囲を眺めると、東西南北が同じだとすると不動堂の前の畑とか竹藪のあたりが絵図中の「御役所」になりそうだが、その辺りは低地になっており、やはりネットに載っていた台地上の所が陣屋跡だろうと思いながら、善哉庵を訪ねた。善哉庵は歴代の代官の墓所で、不動堂から行くには細い道を南へ 100ｍほど緩い坂道を上っていくが、写真 5、 6 でわかるように、その道の右側（写真の左側）は台地になっており、平地で畑と民家のある場所になっている。

写真 5. 不動堂（前方樹木の左下）から善哉庵への道

写真 6. 写真 5 のさらに左上の台地

やはりこの善哉庵のある周辺一帯が陣屋跡だと考えるのが妥当かなと、その時は思った。今から思えば、天満宮の場所も確認しておけばよかったのだが、やはりネットの情報が先入観としてあり、また藤心に早く行きたいという思いがあり、船戸のほうはその位にして、次の訪問地・藤心陣屋跡を目指した。

３．藤心陣屋跡

藤心陣屋跡への道は、途中までは慣れた道だった。陣屋にあった門が移設されている観音寺を経由して陣屋跡に向かう。「←陣屋跡」の小さな看板を左折して細い道に入り、大きな屋敷の先に石碑があった。案内板はここもネットでみた古いものではなく、船戸と同様、新しいものに変わっていた。移設した門の写真が載っており、当時の屋敷を想像し易いものになっていると感じた。（写真 7、8 参照）

写真 7. 陣屋跡の石柱と案内板

写真 8. 案内板（拡大）

また、この陣屋跡は、案内板の後ろ（北）も右（東）も、見晴らしの良い平地（畑）になっており、この周辺に陣屋があったことは容易に想像できた。帰りに陣屋跡周囲の細い道をぐるっと回って帰ったが、周辺は低地（田畑）になっており、特に案内板の後ろ（西側）から隣地の大きな屋敷にかけては周辺の低地より若干高くなっており、いかにも陣屋があった場所だと感じた。

４．観音寺、法林寺の陣屋門

次に藤心陣屋にあった門が移設されている観音寺と法林寺を訪ねた。

まず、観音寺。真言宗豊山派安樂山誓光院観音寺。藤心陣屋跡から南西方向へ 1.5km ほど来た道を戻ったところにあった。この日はお遍路の恰好をした人が大勢来ていて、門だけ見に来た私は一人だけ場違いの感じだった。門は駐車場から境内を少し歩いてすぐに見つかった。立派な門である。（写真 9、 10 参照）事前のネット情報では、観音寺にあるのが旧藤心陣屋の表門、法林寺にあるのが中門とのこと。加村台の屋敷にも同様の門があったことを思うと羨ましく思った。

写真 9. 観音寺入口（奥に門が見える）

写真 10. 観音寺の門

次に柏市名戸ヶ谷の法林寺を訪ねた。真言宗豊山派瑞雲山奨覚院法林寺。こちらも当日はお遍路のような人達が何人かいた。ここも霊場になっているのだろうか。こちらの門は観音寺の門に比べると小さめで、やや迫力には欠けるが、それでも立派な門である。こちらには案内板があり、「有力農民を手代（能吏）に任じ、（略）藩政外の事は手代の裁量に委ねられるものが多かったという。代官所の裁可によって、此の門を通り抜けられたので、「苦抜きの門」と、呼ばれていた」、そして法林寺に移転された経緯については、「廃藩後明治二年代官所解体で、門等が代々筆頭手代を勤めた藤心の石井家の屋敷へ移設され」、更に（法林寺が）「当家よりゆずり受けたものである」と記されている。（写真 11、12 参照）本多家の善政の一端が読みとれる。

「せめてこれくらいの門でもいいから、流山のどこかに残っていてくれれば良かったのに」とあらためて思いながら帰途についた。

写真 11. 観音寺の門

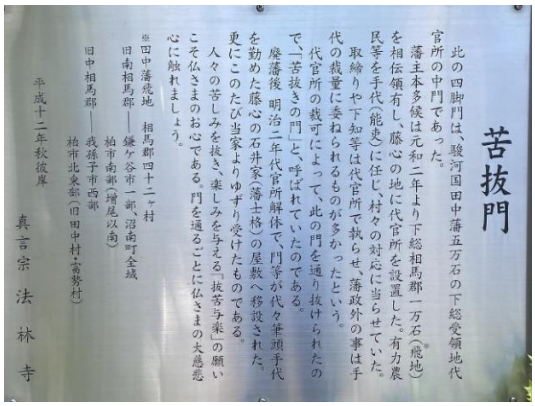

写真 12. 法林寺の門

５．「船戸村絵図」と船戸陣屋跡の位置

以上、船戸陣屋跡と藤心陣屋跡、観音寺と法林寺を駆け足で回ったが、船戸陣屋跡については、家に帰ってから案内板にあった「絵図」と Google マップを見比べてみると、「絵図」に描かれた「御役所」の文字は、不動堂と天満宮の間に描かれており、この位置関係からすると「御役所」（陣屋）は不動堂の前の畑、竹林、現在民家となっている辺りになる。訪問当日は天満宮を訪ね忘れたことで、善哉庵の周辺の台地上のほうが陣屋跡として妥当だろうと漠然と考えたが間違いだったようだ。

確認のため、これまでの「連絡の窓」の「勉強会資料」等を確認してみると関口理事の「船戸陣屋跡を訪ねて」があり、その中では善哉庵周辺を特定しておられた。岡理事に待機ガイドでご一緒した時に相談し、関口理事にメールをさせていただいた。その後、何年か前、「常磐道建設予定地の遺跡発掘調査」の展示会があったことを思い出し、「調査報告書」を確認しようと柏の図書館を訪ねた。しかし、目当ての「調査報告書」を見つけられず、柏の「博物館」に聞いたほうが早いと思い、柏市文化課にメールで問い合わせてみた。すると次のような回答が返ってきた。以下はその要約。

① 現在船戸陣屋の位置関係がわかる文献は「船戸村絵図」だけであり、これをもとに地形図、地形及び周辺の寺社などの位置関係から不動尊の前の一帯を想定した
② 善哉庵の周辺は「絵図」の陣屋の南西から離れた台地に位置するため薄い
③ 船戸陣屋跡の概要については『柏市史近世編』に記載されている
④ 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ-花前Ⅱ-Ⅰ』では、「屋敷跡」が発掘されたことが報告されているが、この「屋敷跡」は、第 25 代代官を務めた増田半兵衛の屋敷跡と考えられる。「絵図」の「御役所」とは所在する場所や立地の地形が異なり、距離も離れている

以上、柏市文化課の回答は「絵図」が示すとおり、「不動堂の前一帯」が陣屋跡であるというものだった。確認のため、後日、柏の図書館で、上記の文献等を確認した。

６．『柏市史』の中の「船戸陣屋」

『柏市史　近世編』第一章第一編「江戸時代前期の市域」の中に、「船戸陣屋付近絵図」の挿絵と「下総領の陣屋と代官」に関する記述があった。（写真 13 参照）以下引用。

「中相馬領の葛飾郡船戸村と南相馬領の同郡藤心村には、本多氏の陣屋（代官所）が置かれていた。船戸陣屋は正重が下総国相馬郡内に知行地九千石を加増されたとき、同時に設置されたといわれる。『資料編七』所収の村明細表などの諸史料によると、船戸陣屋について、「六畝廿壱歩代官屋敷に引」（中略）「中相馬御役屋敷　坪数弐百壱坪　但江戸より拾里程御座候」などとあり、陣屋は六畝歩余りであったことがわかる。（中略）また藤心陣屋については、「南相馬御役屋敷　坪数六百六拾四坪　但江戸より八里程御座候」とあり、二反歩以上の屋敷であったことがわかる」

上記により、船戸の「御役屋敷」は「坪数弐百壱坪」「6畝歩余り」（ざっくりでおよそ 600 ㎡）、藤心の「御役屋敷」は「六百六拾四坪」「2 反歩以上」（ざっくりで約 2,000 ㎡）の広さであったことがわかった。

7.『田中村誌』に記された「船戸陣屋周辺」

『柏市史』や『常磐道埋蔵文化財調査報告書』の他に、『田中村誌』という冊子を見つけた。田中村長・田中朝吉著（1953 年出版）となっている。（写真 14 参照）その中に「本多田中藩封録支配所址」という項があり、「支配所」（陣屋）及びその周辺について詳細の記述がある。以下主な部分は下記の通り。

・川便、利根川へおよそ 6 町。利根川上り花前御郷蔵一カ所、同所御高札場一カ所、江戸日本橋へ 9 里半

・１町西へ四方高台に囲まれ、東上方に初代代官田中権右衛門宅

・北上方高台へ正一位稲荷大明神社を安置、御役所鎮守とし、西隣 6 尺の板庇を境に甚兵衛宅、西南方 40 間に底見ずの池あり、この池は昔時印旛沼と連り、沼の主、この池の主に毎夜金色の鱗を輝かせて、大蛇となって通いし

・池の西上方に岡本吉兵衛建立になる大動尊社を斜に見、池の東方 5～10 間即ち御役所斜前方に道路三ツ又の角に軽い刑罰者の御処置場、御高札場

・御役所南方上 2 町に御朱印地、その御朱印地西方遇に代官平久新五左衛門の宅あり、南方より来る者の目付とせり。東方より来る者には代官岡本吉兵衛宅を配して目付とし

・御役所と平久新五左衛門宅中間御役所寄り高台に代官の墓

・御屋敷西方甚兵衛屋敷の中間に武道場、その南寄に馬舎あり、御役所と不動尊直線の所に井戸あり。（昭和の今日甚兵衛子孫未だ使用中）御役所及白洲は東北高台に囲れし中間にあり

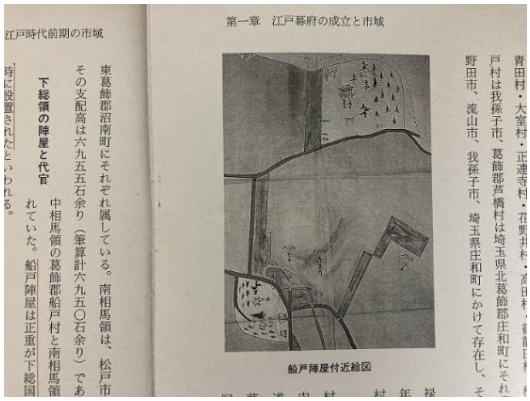

写真 13. 『柏市史』の「船戸陣屋付近絵図」

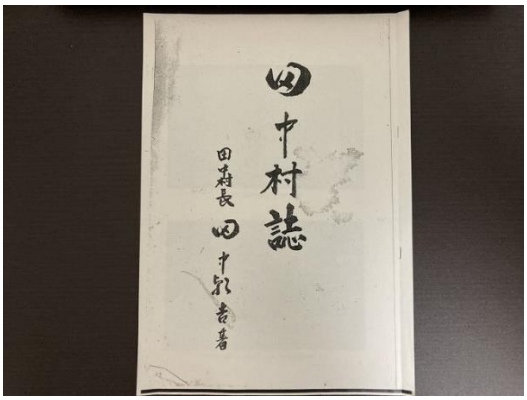

写真 14. 『田中村誌』

但し、この『田中村誌』の「支配所址」に関する部分は、出展が明示されておらず、「陣屋跡」を示す根拠になるかどうかは不明。柏市文化課の担当者にも聞いてみたが、「出展は不明だが他の文章には出展書名が明示されているし、この「支配所址」の他の部分では「さらに古書に云々」という部分もあるので、何らかの文献を見た可能性はあるが、本人が調査考察されたことをまとめたものと思われる」とのこと。

8．再度「船戸村絵図」から「陣屋跡」を想定する

上記の「田中村誌」について柏市文化課に問い合わせた際、「船戸村絵図」のことも問い合わせてみたところ、『柏市史』や不動堂の案内板に載っている「絵図」は「御役所」近辺の一部を拡大したもので「絵図」全体はかなり広範囲のものとのこと。実際に見ること、写真をとることも可能だが、大きくて広げるのが大変、写真は脚立の上から撮影することになる、とのことで、「御役所」周辺、医王寺のあたりまでが入ったものでも十分であることを伝えると、一昨日（6 月 24 日）柏文化課より“ギガファイル便”で絵図全体及び「御役所」周辺部分の写真を送っていただいた。（写真 15、16 参照）

写真 15. 「船戸村絵図」全体

写真 16. 「同絵図」「御役所」周辺

写真 15 は過去の企画展で展示した時のもの。写真 16 は「御役所」周辺部分を拡大したもので、『柏市史』や不動堂前の「陣屋跡」案内板中の「絵図」よりも少し広範囲のもの。左に医王寺が描かれおり、右下には善哉庵も記されている。「御役所」周辺の位置関係がさらに良く理解できる。また、次頁の写真 17 は、「御役所」周辺、特に不動堂周辺を拡大したものものだが（赤字注釈は私が挿入）、よく見ると、「御役所」の下（南）に陣屋門と思われる絵が描かれており、また「底みずの池」と思われるのが水色で塗られていて、さらにその下（南）には「御番」（御番所）と「高札場」と思われる絵も見える。「底見ずの池」は今では跡形も無いが、不動堂の南側のくぼ地にかろうじて龍神様が残っている。（写真 17、18 参照）　（尚、上記の「御番」、「高札場」、「底見ずの池」などは前述『田中村誌』に記載された内容とほぼ合致している。著者はこの絵図を見て書いた可能性もあるのではないか。）

写真 17. 「御役所」周辺拡大図

写真 18. 不動堂と「底見ずの池」と龍神様

最後に、最終確認として気になっていた絵図中の「御役所」の西、「甚兵衛宅」の西側にあって天満宮の前の通りに繋がっている道。6 月初旬に再度訪問し、天満宮のほうから不動堂に行く途中にこの道を見つけた。天満宮のほうからだと不動堂へは坂道を下ることになる。現在は竹藪の脇のかろうじて道と呼べるほどの細い道である。
（写真 19 参照）

以上の調査により、「船戸陣屋跡」（「御役所」）の位置は、不動堂の前（北東）にある現在の個人宅（旧甚兵衛宅？）及びその東側一帯にあったと想定される。さらに、上記 6．『柏市史』に記載されている屋敷の面積「201 坪」（約 660 ㎡）の広さを Google マップ（衛星写真）上に示してみると写真 20 のようになる。（尚、「御役所」の形は広さを表すための便宜的なもの。位置も陣屋門からするともう少し左（西）かもしれない）

写真 19. 不動堂～天満宮前通りへの道

写真 20. 衛星写真上に「御役所」の面積をはめてみる

９．まとめ

・船戸・藤心の陣屋跡については、柏市では、『柏市史』に記載されている「村明細帳」などの諸史料や、船戸陣屋の場合は、寛政５（1793）年の「船戸村絵図」、藤心陣屋の場合は『土村誌』の記述（「案内板」に記載されている）などで位置、屋敷の大きさなどを想定していることがわかった

・柏市では、両陣屋跡共に、案内板も新しくて分かり易いものに建て替えてあり、　何より藤心の陣屋にあった門が観音寺と法林寺に大事に保存されていることを確認　した

・今回、船戸陣屋の位置については 200 年以上前の「絵図」と当時の史料及び現在の地図・衛星写真も使い、実際に現地も歩いてみて、不動堂の前、現在個人宅が何軒かある一帯を想定することができた

１０．　おわりに

今回は船戸陣屋跡の位置を特定することが本来の目的ではなかったのですが、調べ始めると、「どこにあったのか？はっきりさせたい」との欲求にかられ、何日もの間この件に費やしてしまいました。

「はじめに」で述べたように今回の訪ね歩きは、船戸・藤心の陣屋跡と観音寺、法林寺に残る陣屋門を確認し、「加村台御屋敷」にあった陣屋門を想像してみるのが本来の目的でした。

『流山市史研究』の青柳理事長論文にもあるように、田中藩本多家の「御屋敷」が加村台に新設されたのが文久 3 年（1863）ですから、来年でちょうど 160 年になります。明治 6 年(1873)県庁が千葉に移るまでの 10 年間、本田家の屋敷が流山にあったことは事実ですし、その規模たるや、船戸陣屋・藤心陣屋とは比べ物にならないものであったと想像されます。しかもそこが、明治の初期、葛飾県・印旛県の県庁舎でもあったわけで、その間、今の市役所の前の「諏訪道」の「植込み」には観音寺で見たような立派な門がデンと構えていたと思うと、「何で藤心のように、どこかのお寺に移築するなりしてでも残らなかったのだろうか」と何度も言うようですが、残念でなりません。

すでに昨年、「流山市指定記念物（史跡）」認定のお願いが出されていますが、是非来年の「加村台屋敷」建設 160 周年記念として標柱、案内板などの設置がかなうよう会員の一人として何かできないだろうかと考えております。また別の機会に「目安箱」に投函してみたいと思います。

訪ね歩きの報告と船戸陣屋跡の特定が一緒になり、また簡潔にまとめられず、長くなってしまいました。最後まで読んでいただいた方に感謝します。今後はガイドに関するテーマの勉強に注力してまいりますので、よろしくお願いいたします。

写真４　拡大

写真１７　拡大